

オーウェン主義の成立

——一八一五年恐慌とロバート・オーウェン——

松 田 弘 三

新しい作業機・原動機の発明・採用にもとづいて、マニユファクチュア生産を機械制大工業に推転させ、資本主義社会を確立した産業革命は、イギリスにおいて、一八二〇年ごろまでにはほぼ確立され、生産力の巨大な発展と資本の膨大な蓄積とを結果したけれども、その反面、この過程において生みだされ、膨脹した労働者の側に、これに比例する、窮乏と奴隷状態の蓄積をつくりだした。かくして、労働者は次第に一個の階級に結成され、資本にたいする激烈な闘争を開始する。

この現実の進展に照応して、オーウェンの思想も、超階級的博愛主義から脱脚して、次第に独自のオーウェン主義のかたちをとりはじめる。マックス・ペーアがのべているように、「一八一二年から一八二一年まで」は、オーウェンの「精神的能力の絶頂」期であった。まさにこの時期に、オーウェン主義は形成された。そしてそれ以後の彼の活動は、この時期に展開した「見解の復活と宣伝とであるか、もしくはその見解を実践しようとする

試みであつた。⁽¹⁾」

だがさらにこの時期を、ニュー・ラナーク実験とそれにもとづく性格形成論の体系化——一八一三—一六年の『新社会観』(New View of Society)に於ける——の時期と、一八一五年以降の工場法運動と、一八一五—一七一年恐慌の原因究明を契機とする共産主義への前進——一八一七年の『工場労働貧民救済協会委員会への報告』(Report to the Committee of the Association for the Relief of the Manufacturing and Labouring Poor)に表現されてゐる——の時期と、さらに一八二〇年の『ラナーク州への報告』(Report to the County of Lanark)および一八一一年の『社会組織』(Social System)と『窮窮原因の解明』(An Explanation of the Cause of the Distress)に表明されている、オーウェンの経済思想と社会改革思想の完成の時期との、三段階に分つことができよう。そのうちニュー・ラナーク実験と工場法運動の時期については、すでに前稿『オーウェン主義の生成』(『立命館経済学』第七巻第二号所載)においてとりあつたから、本稿においては、それにつづく、一八一五年恐慌の原因把握を動因とするオーウェンの思想的旋回——その劃期は一八一七年である——の問題を考察したいとおもう。

(1) Max Beer, History of British Socialism, Vol. I, 1920, p. 180. 加田哲二訳、世界大思想全集、二一五ページ。

二

オーウェンは、一八一五年六月のナポレオン戦争の終結・平和条約の締結にひきつづいてイギリスにおこつた恐慌の絵のような描写を、『自叙伝』のうちにあてている。「一方これらの「工場法案の」議事が進捗しているあいだに、いわゆる戦争から平和への激変が、英国の生産者たちのあいだに、全般的な困窮をもたらした。穀物

倉も農家の庭もいっばいになり、倉庫はあらゆる製品でおしつぶされそうだった。物価は生産費よりもはるかに低落した。農場労働者は解雇され、しかもどこにも職はみつからなかった。製造業者も農家と同様の状態におちいり、やむなく何百人かづつその労働者を解雇し、多くのばあいその作業をまったく止めてしまったからである。全労働者の困窮がますますはげしくなってきた、上流富裕階級も、こういう事態がつづけば、数十万人の失業者の扶養は、結局自分たちの肩にかかってくるにちがいないことをみこして、せんせんきようきようとしていた。これが一八一六年、すなわち平和回復後第一年目の状態であった。⁽²⁾」

十七年間におよびんだ戦争中、労働者の悲惨の原因はすべて戦争に帰され、戦勝の暁には繁栄の時代がくることが期待されていた。しかるに主としてそのイギリスに恐慌がおこったのである。

そこで、すべての経済学者をなやまし、⁽³⁾もともと老練な政治家を困惑させた、この困窮の原因およびその救済策を考究するために、一八一六年夏、⁽³⁾上流階級によつて、大集会がもよおされた。この集会は、ヨーク公同会のもとにシティ・オブ・ロンドン・タヴァンにおいておこなわれ、当代有数の人々はすべて出席した。オーウェンはさる司教の代理としてこの集会に出席したが、そこでなされたことは、この難問題を調査研究するために、主な政治家・経済学者・経験にとんだ実業家などからなる一委員会を任命したただけであった。カンタベリー大僧正がその議長に任命され、オーウェンも委員に指名された。⁽⁴⁾

(2) The Life of Robert Owen, written by himself. Vol. I, 1857, p. 121. 本位田祥男・五島茂訳、『ロバート・オーウェン自叙伝』(上)、『世界古典文庫』二二七ノミ。〔 〕内は引用者による附加、以下同様。

(3) Frank Podmore, Robert Owen, A Biography, 1909, p. 215.

(4) Life of Owen, pp. 121-123. 訳、二一七—二一九ページ。

その翌日委員会がひらかれ、オーウェンも出席した。そして、この委員会には主な経済学者もいたので、彼がこの問題にたいして十分な説明をあたえらるうと期待していた。しかるに、彼は、指導的な公人その他の人々によって、つぎつぎに語られた冗語に当惑し、驚き、失望させられた。会衆も、この異常な全般的困窮の原因を説明しようとするこれらの試みのいずれにも満足しなかった。最後に、友人に促がされ、議長に指名されて、躊躇しながらオーウェンが起って意見をのべた。⁽⁵⁾

「わたしはいった。この一見わけのわからぬ困窮の原因は、かくも長い戦争のあいだにおこったあらたな異常な諸変化にあると、わたしにはおもわれる。戦争中はあれほど長い期間あれほどひろい規模で、わが陸海軍の浪費を支えるために、人も物資も四半世紀のあいだ、あれほど緊急に需要されてきた。すべての物が戦時価格をえ、しかもそれがずいぶん長いあいだ維持されたので、それはまるで現在の人々には、実業と公事との自然の状態のようにみえた。手と物資の欠乏は、この惜しげのない出費とあいまって、戦争の目的に必要な物資——そしてこれらは直接間接無数であった——の供給において、筋肉労働 (manual labour) に代るべきあらたな機械の発明や化学的発見にたいする需要をつくりだし、それらに大きな奨励をあたえたのである。戦争は、農業者、製造業者、その他の富の生産者にとっては、大きな、もつとも浪費的な顧客であった。そしてこの時期に多くの者が大いに富んだのであった。戦争の最後の年の経費だけで一億三千万ポンド、すなわち平時の経費を八千万ポンド超過するものであった。そして平和〔条約〕が調印されたその日に、生産者のこの大きな顧客は死んだ。そして需要が減少したので物価も下落し、戦争に必要であった物品のごときは原価さえも回収しえないようになった。穀物倉

や農家の庭はいっぱいになり、倉庫はつめこめるだけつめこまれた。そしてこれがわれわれの社会の人為的な状態であつて、この富の大過剰こそ現在の困窮の唯一の原因なのである。農家の庭や倉庫のストックを焼け、そうすれば繁栄は、まるで戦争がまだつづいているかのように、ただちに再開されるだろう。このひきあう価格での需要の欠乏が、生産業主たちに、このようなありあまつたストックが市場から姿を消すにいたるまで、その生産高および生産費を減少するためにとりうる方策を考えさせたのである。こういう結果をもたすために、生産においてあらゆる節約がはかられた。そして人間は、戦時中に広範になしとげられた機械および化学的の発明よりも、いっそう費用のかかる生産機械であるので、人々は解雇され、機械がこれに代らせられたのである。そのあいだに失業者の数は、陸海軍の復員によって、さらに増加した。このゆえに、戦争がつづいたあいだその労働が大いに需要された全階級の仕事が欠乏し、大きな困窮がおこつたのである。この機械力と化学力の増大は、たえず筋肉労働にたいする需要およびその価値を減じており、そしてなお減じつづけるであろう。そしてこれらの力の増大は、社会をつうじて偉大な変革をなしとげるであろう。けだし、これらの新しい発明と発見ともよつてつくりだされたあらたな力はすでに莫大なものであつて、筋肉労働にとって代りつつあるのであるから。⁽⁶⁾

要するに、現在の困窮の原因は、戦争によって促進された機械生産の巨大な発展という状況のもとで、戦時需要が突如消滅したためにおこつた、大規模な生産過剰であるというのであつて、そのかぎり、オーウェンの見解はこの恐慌の動因を一応正しくつかんでいるといえるであろう。

(6) Life of Owen, pp. 122-123. 訳二二三—二二一ページ。

(9) Ibid., pp. 124-125. 訳二二三—二二三ページ。

ここでオーウェンは、『英帝国富源論』(Treatise of the Wealth, Power and Resources of the British Empire, 1814)の著者として有名な、トリック・コルカーン(P. Colquhoun)から質問をうけた。このあらたな機械力と化学力がどれくらい筋肉労働にとつて代ったとおもうか、というのである。英国の人口は当時(一八一六年)約千七百万人で、生産者は従来その五分の一と見積られてきたが、近年婦人および児童の労働が使用されるようになったのでその四分の一とみられる。すなわち、大英国の富は、機械力と化学との助けをかりて、四百二十五万人の筋肉労働によって年々生産される、といつてよいであろう。これを知っていたので、オーウェンは答えた。「それ〔機械力〕は今日では筋肉生産力の全体の高をこえるにちがいない。」すなわち、五百万人の労働をはるかにこえるにちがいない、と。そこで、大僧正はオーウェンにたいしていつた。「あなたのなさつた陳述は非常に興味があり、また重要なものです。だが現在の困窮にたいする救済策をおもちですか。」オーウェンは答えた。「いや、用意がありません。こういうことを求められるとはおもっていませんでしたので。」大僧正はいつた。「それでは、次回の委員会までに、この問題についての報告書をだして頂きたい。」オーウェンは委員会の決議にしたがつて、そのことを承諾した。^(?)

このころ、サー・ロバート・ピールの工場法案——オーウェンが起草したもの——に関連して、工場主たちは、全国の紡績工場の紡錘数を調査して、下院の委員会に提出した。この記録によつて彼らは、紡績業の国家的重要性と国家がその繁栄に干渉すべきではないことをしめそうとしたのである。だがその記録から、オーウェンは綿糸紡績のみに使われている機械によつて代位された筋肉労働の高をかなり正確に見積ることができた。この高は、当時八千万人の人口の筋肉労働をこえ、それによつて代つたことがわかつた。オーウェンは、この記録を手

に入れ、自分の計算をしおえると、これをコルカインのところへもっていった。コルカインはいった。「これで、最近の莫大な戦費をばらいたながら国民の富が年一年急速に増加した理由がわかりました。だが英国の全工業に導入されたあらたな機械力と化学力の全部によって代位された高は、いったいどれほどでしょうか。」オーウェンは答えた。「羊毛・亜麻・絹工業等ののこりの部門を加えると、この新しい力は優に人口二億の筋肉労働をこえるでしょう。しかし全国のいつさいの他の部門をふくむ、機械力と化学力の高はとうてい評価することはできません。」かくして、この帝国における新しい機械力と化学力は、二億以上の人口の筋肉労働に代位したということが、信頼すべき記録から確かめられたと、コルカインによって公表されたので、その高がその後経済学者たちによって——その出所を知ることなしに——くりかえされることになった。⁽⁸⁾

オーウェンはいまや、現在の困窮の原因および救済策を考究する大僧正の委員会に作成を約した、報告書の執筆に全力を注いだ。この報告書は、翌一八一七年三月委員会に提出された。オーウェンが席について、それを提出し、提案した救済策の概略を説明したとき、大僧正と委員たちは、びつくりした様子で、なんとおおう、どうしようかと、当惑したようにみえた。委員会における政府党の主な人々と大僧正とのあいだで、いくたびか打合せがおこなわれたのち、大僧正はオーウェンにむかっていった。「オーウェン君、本委員会は提案事項においてこのような広範な、原理上も実際上まったく新奇な、しかも国民的大変革を意味する報告書を、考究するだけの用意がありません。これはよろしく、下院でいま開催中のスタージェス・ボーン氏の救貧法委員会の議にかけるがよろしい。」と。オーウェンはその勧告を受諾した。⁽¹⁰⁾

スタージェス・ボーンStuges Bourne'sの救貧法委員会 (Stuges Bourne's Committee on the Poor Law) とは、一七九五年以来の

スピーナムランド法のもとで教区の扶助をうけてきた貧窮労働者たちにたいして、地主および資本家階級が、増大した救貧税の負担を免れる意図のもとに、経済学者たちとくにマルサスの支持をうけて、企てていた救貧法改悪の「陰謀」を実現するための機関であった。その企図は結局、貧民をすべて労働場ワルケッペンに収容することを規定した一八三四年の新救貧法に結実したところのものである。

オーウェンは、この救貧法委員会の一員であったブローガムをつうじて、自分が提出すべき法案をもち、参考人としていつでも審問に応じることを、委員会に通告した。しかし彼は、委員会に召喚されてまる二日間待たされたあげく、それは「この委員会で審問すべき筋のものではない。」といいわたされた。⁽¹¹⁾そこでオーウェンはまず自分の報告書を公刊し、ついで公開集会を開催し、新聞紙上へ書簡を発表することによって、直接大衆に訴えて、支配階級の陰謀と闘うことを決意したのである。

- (7) *Life of Owen*, pp. 125-126. 訳、二三三—二三五ページ。
- (8) *Ibid.*, pp. 126-127. 訳、二二五—二二七ページ。
- (9) Podmore, *ibid.*, p. 217.
- (10) *Life of Owen*, pp. 131-132. 訳、二三四ページ。
- (11) *Ibid.*, pp. 131-133. 訳、二三五—二三七ページ。

三

この報告書『工場労働貧民救済協会委員会への報告』(Report to the Committee of the Association for the Relief

of the Manufacturing and Labouring Poor, 1817) は、「まことにオーウェンの生涯における転回点をなすもの」であった。それは、「工場改革者ならびに教育の先駆者としてのオーウェンから社会主義と協同の祖としてのオーウェンへの移行をしるすもの」であった。¹²⁾

オーウェンは、報告書を、当面する困窮の原因の解明からはじめている。「現在の困窮の直接原因は、人間労働の価値低落である。このことはヨーロッパとアメリカの、しかし主としてイギリスの、製造業における機械の全般的導入によって生じた。そしてイギリスでは、変化はアークライトとワットの発明によって大いに促進されたのである。」「社会における欲望の諸対象物の製造に機械が導入されたことは、それらの価格を減少させた。価格の減少はそれらにたいする需要を増加させ、そしてそれは一般に、機械が導入されたのちには以前よりも多くの人間労働を雇用させるほどの程度にたっした。」「これらの新しい機械の採用の最初の結果は個人の富を増加させ、「それがさらに」よりいっそうの発明にたいするあらたな刺戟をあたえた。かくてひとつの機械的改善は、すぐびきつづいて他の改善をよびおこした。」

「個人の富はまもなく国民的繁栄へとすすんだ。そしてこの国は、以前のいかなる時期にも知られなかったような、力の發揮と消費高とを必要とする、二十五年の戦争のあいだに、敵を困惑させ味方を驚かしたところの政治力の高さに到達した。そのように着々と、しかもすみやかに、わが国はこの羨むべき状態へとすすんだので、それが富裕と富を創造する種類の力とを獲得するのに、なんの限界もないかのようにみえた。戦争そのものは、それがヨーロッパ全体に、「さらに」アジアへ、アフリカへと、その破壊をひろげていたときに、われわれの無尽蔵の資源をひきだすあらたな刺戟にすぎないようにおもわれた。そして結果において、戦争はそのように作用し

た。全世界にわたって戦争がひきおこした青年たちの生命の破壊と、非常に大きな規模での——多分古代にも近代にもくらべるもののないほどの——戦争に必要なすべての物資の浪費とは、さまざまの生産物にたいする需要をつくりだした。それは英国の製造業者の過度に稼動した産業が、彼らが発明し、活動させえたすべての機械の助けによって、辛うじて供給しうるほどのものであった。⁽¹³⁾

「しかし平和がついにやってきた。そして大英国は、成人の最大限の力における、もっとも勤勉な一億の人間の労働をこえると、十分いいうるほどの、たえまなく活動している新しい力を保有していることがみいだされた。」「かくてわが国は、戦争の終結にあたって、あたかもわが国の人口が、現実に十五倍ないし二十倍に増加したとおなじ効果を發揮するところの、生産力をもつにいたったのである。そしてこの生産力は、主として最近の二十五年間につくりだされたものである。戦時中に大英国によってなしとげられた。富と政治的影響力とにおける急速な進歩は、したがってもはや驚くにあたらない。原因はまったくその結果に適應していたのである。」

「しかしながら、いまやあらたな状況が生じた。労働生産物にたいする戦時需要はやみ、それらにたいする市場はもはやみだされなくなった。そして世界の収入は、そのように大きな「生産」力が実際に生産するところのものを、購買するには不十分となった。すなわち、需要の減少が生じたのである。それゆえ、供給の源泉を縮小することが必要になると、ただちに機械力が人間労働よりずっと安いことがあきらかとなった。その結果機械力はひきつづき働かされたが、人間労働は「機械に」とって代られた。そして人間労働は、いまや普通の安楽さで個人が生存するのに絶対に必要なよりも、はるかに少い価格でえられるようになった。⁽¹⁴⁾」

以上が、一八一五—一七年恐慌の原因にかんするオーウエンの分析である。筋肉労働にかわる機械生産の大規

模な導入、その結果としての生産力の巨大な発展、無制限な戦時需要など、産業革命とその促進要因としての戦争との意義は、正確につかまれているようにおもわれる。(人間労働に代位した機械力が一億ないし二億人以上の労働に相当するという数字はともかくとして。)そこで恐慌の原因は、このおそろしく増大した生産にたいする、戦争終結にともなう急激に減少した需要、両者の矛盾にもとめられている。さらに供給の縮小にともなうて、人間労働がそれよりも安価な機械力によって代位され、労働の価格は生存費以下に低落したとされる。そのことは当然、需要をいっそう減退させ、恐慌をいよいよ激化させるであろう。

ここでオーウェンは、機械による労働者の駆逐の傾向を確認している(いわゆる「補償説」の否定)が、それ以上にこの過程の経済学的な分析——それにとまらぬ資本の構成の変化や、過剰人口の産出の把握など——はしていない。機械の使用にとまらぬ資本構成の変化は、ななじ一八一七年にジョン・バートン(John Barton, *Observations on the Circumstances which influence the Conditions of the Labouring Classes of Society*)がはじめた認識し、その影響によって、リカードオは『経済学および課税の原理』第三版(一八二一年)にあらたに「機械論」(第三章)を附加したのである。オーウェンにとつての問題は、機械力は人間労働より安いことであるが、それは機械の価値はそれによっておきかえられる労働力の価値よりも低い⁽¹⁶⁾という意味に理解されるべきであろう。もっとも機械による駆逐の結果過剰となった労働の存在のために、彼がのべているように、労働力の価格はさらにその価値以下に低落するであろうが。

かくして、オーウェンは、恐慌の原因を、無制限に拡大する生産と制限された消費——とくに労働者階級の狹隘な消費限界によって規定された——との矛盾⁽¹⁶⁾においてとらえている。産業革命によって確立された資本主義社

会をはじめておそったこの過剰生産恐慌——もっともそれはまだ世界恐慌でもなく、また一八二五年を起点とする資本制的な循環性恐慌でもなく、それへの「過渡的」恐慌であつたが——にたいするこのオーウエンの把握は、経済学史のうえでいかなる意義をもつものであらうか。

- (12) G. D. H. Cole, 'The Life of Robert Owen', p. 177.
- (13) Owen, Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor, Supplementary Appendix to Life of Owen, Appendix I, p. 54.
- (14) Ibid. pp. 54-55.
- (15) Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 411. 長谷部訳「六四〇ページ」。
- (16) レーニン「市場理論の問題へのおぼえがき」邦訳『全集』第四巻、五五、五六ページ参照。
- (17) 吉沢芳樹「古典経済学の完成」出口勇蔵編『経済学史』一五四—一五五ページ、参照。

四

オーウエンの『救貧委員会への報告』が公刊された一八一七年は、また産業資本の最大のイデオログたるリカードオ (David Ricardo) が『経済学および課税の原理』(Principles of Political Economy and Taxation) の刊行によって、古典経済学をその発展の頂点になつせしめた年であつた。リカードオの労働価値論はただちにオーウエンによって撰取され、のちに『ラナーク州への報告』(一八二〇年)における彼の経済思想の出発点となるのであるが、ここではまだその影響はみとめられない。いま問題となるのは、リカードオによる一八一五年恐慌の原

因把握とひいては一般に恐慌にかんする彼の見解の、オーウェンのそれとの対比である。

リカードオは『原理』において、セイの販路説を採用し、一般的過剰生産の可能性を否定している。すなわち、いう。「セイ氏は、需要はただ生産によってのみ制限されるものであるから、一国において使用されえないような資本の額はないということをもっとも十分に説明した。」「生産物はつねに生産物または勤労によって購買されるのであるから、貨幣はたんにそれによって交換がおこなわれる媒介物にすぎない。ある特定の商品があまりにたくさん生産されて、それについてやされた資本をつぐなえないような供給過剰(over)が市場におこるということは、あるかもしれない。しかし、こういうことがすべての商品についておこるということは、ありえない。」⁽¹⁸⁾このリカードオの見解は、資本制生産、とくにその前提条件たる商品流通にふくまれている対立的契機——販売と購買との分裂——を否認することによって、恐慌を否定するものであるが、このような恐慌観にたつリカードオが、当面の一八一五年恐慌について、これを偶然的・一時的原因にもとづくものとみなしたことは当然である。すなわちリカードオは、戦争から平和への移行にともなう「一部門から他の部門への資本の移動によってひきおこされる」、「商業の径路における突然の変化」(第十九章標題)から、この恐慌を説明している。「長い戦争のあとでの平和のはじまりは、いっばんに商業のうえに重大な困窮をひきおこす。それは諸国のそれぞれの資本が従来投じられていた部門の性質を大いにかえ、そしてこれらの資本があらたな事情によってもっとも有利となるべき位置におちつきつつある期間中、多くの固定資本は遊休させられるか、またはおそらく全部失われて、労働者は完全に雇用されることはないだろう。この困窮の持続期間は、たいていの人が長いあいだ慣れた投資部門を放棄するにあたって感じる厭気の強さいかにしたがって、あるいは長くあるいは短い。」これは要するに、平

均利潤率の形成のための諸部門間における資本移動の、特殊のばあいにはすぎない。かくしてつぎのようにいわれる。「しかしながら、このような困窮が戦争から平和への変化にたちともなつて生じたときには、われわれはこのような原因の存在を知っているのであるから、つぎのように信じるのが当然であろう。すなわち労働維持のための元本は実質的に減じたわけではなく、むしろその通常の径路から他に転用されたのであり、一時的苦難のうちに、国民はふたたび繁栄にむかつて前進するであらう、と」⁽²⁰⁾ リカードォが恐慌の本質をいかにまったく理解してはいないかは、いまやきわめてあきらかであらう。

オーウェンとリカードォとの右の著作に二年おくれて、シスモンディ（J.-C.-L. Simonde de Sismondi）の『経済学新原理』（Nouveaux principes d'économie politique, 1819）があらわれた。スイスの経済学者シスモンディは、とくに一八一五年の恐慌を問題にしているわけではないが、恐慌の原因を生産と消費との不均衡にもとめることによつて、経済学史上はじめて恐慌の理論的把握をなしとげたとされている。

彼はまず、セイ——リカードォの販路説を批判して、「この原理をもつては、商業の歴史においてもつともしばしばみとめられる事実、すなわち市場の梗塞を理解することも絶対に不可能となる。」⁽²¹⁾ という。そして資本制生産のもとでは、一方における生産の無制限の拡大と、他方における消費の絶対的な縮小とが生じると主張する。すなわち、新しい機械をはじめ採用したものは一時的に利潤を増大させるが、その普及にともなつて利潤は低下する。かくして発明は発明をうみ、生産力は無限に増大する。しかるに、機械の採用は多数の労働者を解雇し、大工業の発展は手工業者と小商人を破滅させ、また大農経営の成長は小農民を消滅させる。かくして、これらの人々の消費は減少する。したがつて、「消費をこえる生産の過剰」にもとづく恐慌は、不可避

的であるというのである。

このようなシスモンディの過少消費説においては、恐慌は慢性的なものであり、資本制生産の存立そのものが不可能となる。そして機械の導入その他によって生産力を急速に発展させる資本制生産の歴史的進歩性はすこしも認識されず、土地所有農民や手工業組合の均衡ある小商品生産への復帰がさげられることとなる。これは資本主義の発展のまえにほろびゆく小ブルジョアの立場の表白であつて、恐慌を把握したといつても、オーウェンとは、まさに逆の見地である。

シスモンディの『新原理』出版の翌年、リカードォの最大の論敵マルサス(Thomas Robert Malthus)は『経済学原理』(Principles of Political Economy, 1820)を刊行した。その第七章「富の増進の直接的原因について」は恐慌の問題をとりあつてはいるが、そこで彼は販路説を否定し、有効需要の不足が富の増進の阻止要因であることを強調して、資本蓄積の結果として需要と供給との不一致が生じ、一般的過剰生産がおこると主張している。とくに彼は、一八一五年の恐慌の分析に一節(第十節)をあてて、詳細に論じている。すなわち、いう。ナポレオン戦争の終結直後に「きわめて異例の(有効)需要衰微の時期がおこつた。」「それはほとんど三分の一におよぶと推定されている、土地の粗生生産物の価値の、異常な下落ではじまつた。この下落が農業者の資本を減少し、そしてさらにより以上に地主および農業者の収入を減少したとき、製造品および外国品を購買する彼らの能力は、必然的に大いに減少された。国内需要の不足は、製造業者の倉庫を売れない商品でみたした。……そして商人および製造業者の利潤したがって支出は、これ「不十分な国内需要」に比例して低められた。このような好ましくない変化が地代および利潤におこっているのに、戦争中に(労働にたいする継続的需要によって)人口にあたえら

れていた有力な刺戟は、あらゆる労働の供給を注ぎこみ、（これは）解散された陸海軍の兵士と農業者および商人の損失から生じる需要の不足とに助勢されて、一般的に労賃（および利潤の両者）を低減し、そしてこの国を資本および収入の非常な減少の状態においたのである。⁽²²⁾」

このようにマルサスは、穀物価格の下落を出発点として、その影響の波及するところに一般的過剰生産が成立するといふのである。だがそれと同時に、マルサスは、資本蓄積を非生産的労働者の生産的労働者への転換としてとらえ、これによって生産物は増加するが、労働者数は同一であり、資本家および地主の需要は節約によって減少しているから、蓄積の結果需給の不均衡が生じる。⁽²³⁾この不均衡をうづめるために、非生産的消費者——とくに地主——の所得がなければ、恐慌が生じると主張するのである。⁽²⁴⁾

このようなマルサスの恐慌論は、一般的過剰生産をみとめたかぎりでは、リカードよりも優越しているかのようにみえるが、彼はけつして資本制生産の内在的矛盾の爆發としての恐慌の必然性をみとめたのではなく、ただ恐慌をきわめて皮相かつ無媒介的に流通上の範疇たる有効需要にむすびつけ、それによって社会の寄生者たる地主階級の存在意義を経済学的にこじつけようとしたにすぎなかった。かくして地主階級のイデオログたるマルサスの恐慌論は、その本質において、きわめて反動的なものであったといわねばならない。

(18) Works of Ricardo, Vol. I, pp. 290-292.

(19) 拙稿「資本蓄積および恐慌にかんするリカードの理論とセイの市場法則」、『立命館経済学』第五卷第一号、参照。

(20) Works, I, p. 265.

(21) Sismondi, Nouveaux principes, tom. I, p. 276. 菅圃正朔訳、世界古典文庫（上）二八五ページ。

- (22) Malthus, Principles, 2 ed. pp. 416-417. 吉田秀夫訳、岩波文庫、(下)三八一―二ページ。()内は第二版の文句。
(23) Ibid., p. 316. 訳、(下)一八九ページ。なお、溝川喜一「マルサスの恐慌論について」、『甲南論集』第五卷第四号、参照。
(24) Ibid., p. 400. 訳、(下)三五三ページ。

五

以上において、オーウェンの恐慌観と対比するために、当時の主要な経済学者たちによる恐慌の原因把握を、当面の一八一五年恐慌の分析とあわせて、概観した。それによってわれわれは、オーウェンの恐慌把握が本質的にいかにすぐれたものであるかを知らうであらう。機械の採用は、生産力の巨大な発展と豊富な富の生産ともたらす。しかるにその機械の導入は、同時に労働者を駆逐し、労働の価値を低下させ、この増大した生産と減少した需要との矛盾によって恐慌がおこる——このようにオーウェンは考えた。彼は、機械の使用そのものではなくて、機械の資本制的な利用がこの矛盾をひきおこすことをつかんでいたのである。数ヶ月後に彼はのべている。「人間性にはいる最大の祝福たりうるところの機械は、現存秩序 (arrangements) のもとにおいては、最大の禍となつてゐる。」⁽²⁵⁾と。そのかぎり、彼の恐慌論はたんなる過少消費説ではない。

もつともオーウェンに過少消費説的な見解がないわけではない。彼のいっそう成熟した経済思想をしめす『ラナーク州への報告』(一八二〇年)のなかで、つぎのようにいわれている。「労働階級の効果的な、さもなければ有益な勤労を、ひとり阻害するものは、利潤のえられる市場の欠乏である。世界の市場は、ひとり労働階級の勤労にたいしてあたえられる報酬によつてのみ、つくりだされる。そしてこれらの市場は、この階級が彼らの労働

にたいして、良いあるいは悪い報酬をうけるのに比例して、多くまたは少く拡張され、そして利潤がえられるのである。しかし社会の現在の秩序は、労働者が彼の労働にたいして「十分な」報酬をうけるのをゆるさないであろうし、そしてその結果すべての市場が欠乏するのである。⁽²⁶⁾ここでは市場の創出における生産的消費の意義がまったく見落されていることはあきらかである。だが同時に「社会の現在の秩序」が矛盾をつくりだすことも明示されている。

さらに後年のことであるが、オーウェンは『人類の精神と実践における革命』（一八四九年）のなかで、ニュー・ラナークにおける体験を回顧してつぎのようにのべている。「しかもこの「ニュー・ラナーの工場の」二千五百の労働している人々は、一世紀足らずまえにはそれをつくりだすために六十万の労働する人々を要したのおなじだけ多くの、真の富を社会のために日々生産していたのだ。わたしは、二千五百人が消費した富と六十万人が消費したであろう富とのあいだの差額はどうかになったのか、と自問した。」いうまでもなくそれは、使用された資本にたいする五分の利子とそうえになお三十万ポンド以上の利潤となつて、資本家たちのポケットに入ったのである。「この考察は、以前に考えていたよりもいっそう強く、すべての人々とくに生産階級に多くの悲惨をあたえている、現在の制度の誤謬と巨大な不合理性とを、わたしに感じさせた。」「もし、不十分に使用されてきたとはいえ、この新しい富が機械によつてつくりだされなかったとすれば、ナポレオンに反対して社会の貴族的原则を擁護したヨーロッパの戦争は、とうてい継続しえなかつただろう。しかもこの新しい力は労働階級がつくりだしたものでしたのである。だからわたしは、……機械の発明と化学上の発見から生じた……富をつくりだすあらゆる科学的的方法の進歩を研究することに、心をひかれた。そしてわたしは、賢明に使用されれば、すべての国民

の永久の繁栄を確保するに足るよりもずっと多くのものが、すでに存在していることをみいだした。⁽²⁷⁾

このような認識こそ、オーウェンをして現存社会を根底的に批判し、共産主義への思想的前進をなしとげさせた原動力であったが、それはまた恐慌の把握においても、彼を科学的な見解へ接近させた、豊かな理論的素材をふくむものであったといえよう。ここには、富の生産の急速な増大にもかかわらず、労働者の消費は拡大せず、その差額が利潤となったこと、富は労働者のみがつくりだすものであること、現在すでに全国民の必要をみたしてありあまるほどの富が存在すること、などが語られているからである。

まことに彼のいうところの、「富を創造する豊富な手段のただなかにおいて、すべての者が貧困である。」⁽²⁸⁾というところこそ、恐慌をひきおこす動因であるが、このような矛盾を内包する「現在の制度」とは、私有財産制度にほかならない。いつそう正確に言えば、資本制生産様式そのものである。⁽²⁹⁾資本制生産様式の基本的矛盾である生産の社会的性格と領有の私的形態とのあいだの矛盾こそ、生産の無制限的拡大と大衆の貧困による制限された消費との矛盾として現象し、ついに恐慌となって爆発する、その基本的原因にほかならないのであるが、⁽³⁰⁾オーウェンは右の引用にしめされているように、そのことを事実上理解していたとおもわれる。機械の資本制的利用が生産と消費との矛盾をうみだすという認識は、社会的生産と私的領有との矛盾の把握の、別のことばでの表現にほかならないからである。

かくて、販路説によって恐慌を否定したりカードオヤ、恐慌防止における地主階級の積極的意義を強弁したマルサスにたいしてはもとより、おなじく生産の無制限の増大と大衆の貧困化による消費の縮小との矛盾から恐慌を説明したシスモンディにたいしても、恐慌の「根源」を「生産の諸条件のうちのみている」⁽³¹⁾点において、オー

ウェンの決定的な優越性はあきらかであろう。それは、これらの経済学者が産業資本家や地主や小生産者の理論的代表者であったのに反して、オーウェンがひとり資本主義にたいして真に批判的な階級——プロレタリアート——を代表していたからであるとおもわれる。

- (25) Owen, Address, Aug. 21, 1817, *Life* IA, p. 111.
- (26) Owen, Report to the County of Lanark, *Life*, IA, p. 270.
- (27) Owen, *The Revolution in the Mind and Practice of the Human Race*, pp. 21-22.
- (28) Owen, Report to Lanark, *ibid.*, p. 286.
- (29) 共産主義社会においてはもとより恐慌は存在しない。このような社会では、「すべてのばあいにおいて、それらの労働が価値の標準であろう。そして肉体的な、精神的な、そして科学的な労働の量における累進的な増大がつねに存在するときには、もしわれわれがそれらの秩序のもとにおいて人口が増加すると想定するならば、おなじ割合でその大きさがどうであろうとも、社会の全産業において不断に拡張する市場または需要が存在するであろう。そのような秩序のもとにおいては、術語的に『バッド・タイムズ』とよばれているものはけつしておごりえなう。」(Owen, Report to Lanark, *ibid.*, p. 303.)
- (30) Engels, *Anti-Dühring*, Dietz Verlag, S. 334. 『フランクスマーエンタルス選集』第一巻、四六〇—四六一ページ。Marx, *Das Kapital*, III, S. 272. 長谷部訳、第三巻、三五五ページ、参照。
- (31) レーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」、『全集』第二巻、一五一ページ、参照。レーニンはそこで、シスモンディの過少消費説の誤りをつぎのように指摘している。それは、恐慌を生産と消費との矛盾、不十分な消費のみによって説明し、現象の根源を生産の外部にみている。これに反してマルクスの恐慌論は、生産の社会的性格と領有的私的形態、生産の無政府性によってこれを説明し、生産の諸条件のうちその根源をみている。この理論は生産と消費との矛盾、不十

分な消費の事実を、完全にみとめるが、それを一つの生産部門だけにかんするものとして、それにふさわしい従属的な地位をあたえる。この事實は、資本主義の基本的矛盾によってひきおこされる恐慌を説明することができないのである、と。

六

このような恐慌把握にたつて、オーウェンは当面の困窮の救済策をつぎのように提唱する。「ちよつと考えてみると、労働階級がいまや機械力と競争する適当な手段をもたないことが、あきらかとなるであろう。そこでつぎの三つの結果のうち、一つが必ず生じなければならぬ。一、機械の使用が大いに減らされねばならぬ。さもなければ、二、「人々に」現在の程度における生存をゆるすために、数百万人の人々が飢えなければならぬ。さもなければ、三、有利な仕事が貧民と失業労働階級のためにみいださねばならぬ。「そして」その労働に機械は、現在のようにとつて代るように適用されないで、手段として役立つようにされねばならぬ。」

しかし「現在の商業的体制のもとでは」、機械力はその国を破滅させることなしには、他の国々で活動をつづけているのに、ある国で停止されることはできない。そしてかりにそういうことが可能だとしても、それは野蛮な行為であろう。しかしいかなる政府も、機械力が数万の人々を飢えさせることをゆるすならば、それはいさう野蛮な暴虐な行為であろう。だから最後の結果、すなわち「有利な仕事⁽³²⁾が失業労働階級のためにみいだされねばならぬ。「そして」その労働に機械は、現在のようにとつて代るように適用されないで、手段として役立つようにされねばならぬ。」ということだけが考慮にあたいする。

そこでオーウェンは、失業者救済策として、有名な「一致と協同の村」(The Village of Unity and Mutual Co-

(33) のプランを展開している。その意図するところは、「貧民改善のためのなんらかの計画は、彼らの子供たちが悪習にそまるのを防ぎ、彼らによい習慣をあたえ、彼らのために有益な訓練と教育とを提供し、大人たちに適当な労働を提供し、彼らの労働と消費とを彼ら自身と社会とに最大の利益をうみだすようにふりむけ、彼らを不必要な誘惑からひきはなし、彼らの利害と義務とが緊密に統一されるような環境のもとにおく、手段と結びつかねばならぬ。」(34) ということである。

そのプランは、一施設が五百人から千五百人まで、平均して千人の人々からなり、千エーカーから千五百エーカーの土地をもち、農業と製造業とを兼ね営むものとされた。労働も消費生活も協同的に結合しておこなわれる。村は住民たち（千二百人）が一体として住むべき方陣形の建物からなっている。その三つの側は夫婦と二人の幼児のための四部屋からなる居室および寝室であり、いま一つの側は三歳以上の子供たちのための共同寝室である。そのほかこの建物には管理人の部屋、診療所、旅行者の宿泊所、物品販売所などがある。方陣形の内側には三つの公共建物がある。中央の建物は食堂と共同炊事場であり、右側の建物は幼稚園と講義室および礼拝堂であり、そして左側の建物は学校と図書館、そのほか委員室、大人のための部屋などである。方陣形のなかの空地は運動場であり、建物の外側は道路で区劃された庭園になっている。そのむこうの一方の側には機械的製造業のための建物（工場）があり、そのほか厩舎や屠殺場がある。他の側には洗濯と漂白場、さらにはなれて粉挽場と発芽・醸造施設がある。これらをとりにかこんで農場・牧草地などがある。(35)

このプランはあきらかにニュー・ラナークをその原型とするものであったが、そこには本質的な相異があった。(36) ニュー・ラナークは市場のために財貨を生産する工場であり、したがって商業的需要の変動に依存していた。計

画された村は農業生産を主とし、製造業はむしろ副次的なものとされていた。(そのことは後掲の建設費用のうち土地購入費および農場の施設費ならびに元本と工場建設費との比率によってもあきらかである。) その理由は、当時の労働者の多くがエンクロージヤによって土地を失ってからもなくであって、過去にたいするあこがれをもっていたということに対応するものでもあったが、それ以上にオーウェンが工場主として、市場に左右される工業は、協同村の基礎たりえないことをよく知っていたからであるとおもわれる。⁽³⁷⁾したがって計画の村は、主として自給自足的な経済単位として考えられている。しかしオーウェンの出発点はあくまで工場制度であって、協同村も、産業革命によって可能になった新しい技術にもとづいて農業と工業とを結合するものとして、考えられていたのである。

(32) Owen, Report on Poor, Life, IA., p. 55.

(33) Ibid., p. 94-65, figure.

(34) Ibid., p. 57.

(35) Ibid., pp. 57-58.

(36) Cf. G. D. H. Cole, The Life of R. Owen, p. 180.

(37) ローゼンベルグ、直井武夫・広島定吉訳『経済学史』第二巻、三五一ページ、参照。

プランのうちで、教育は当然きわめて重要視された。全村は経済単位としてと同時に、教育単位として考えられていたからである。子供たちは三歳になると、学校へゆき、食堂で食事をし、共同の寝室で眠るようにされる。もちろん両親はいつでも子供にあうことができるが、学校を出るまでに、彼らはすべての必要な知識を教えられ、

両親その他から悪習をうけるのを防ぎ、社会の有用な一員たらしめるとともに、一生をつうじて彼らを幸福にみちびくような性格をあたえられる。さらに、大人たちの習慣と行為も（共同の生産と生活のなかで）次第に改善されてゆくであろう。婦人は幼児の世話、共同の炊事や衣服づくり、菜園やある種の製造業において、働く。子供たちも一日の一部分、園芸や製造業の軽い仕事を助ける。大人たちはもちろんすべて農業・工業またはその他の有益な職業に従事するものとされる。⁽³⁸⁾

千二百人の男女のためのこのような施設の建設費用は、土地が購入されるばあいには、つぎのとおりであるという。

1200エーカーの土地	
1エーカーあたり30ポンド	36000
1200人のためのアパート	17000
方陣形のなかの三つの公共建物	11000
工場、屠殺場、洗濯場	8000
300の寝室のための家具	2400
各々8ポンドあたり	
炊事場、学校、共同寝室の家具	3000
二つの農場施設、粉挽場、	5000
発芽・醸造付帯施設共	
方陣形の内側と道路をつくるのに	3000
スペース	
鋤耕のもとでの農場の元本	4000
臨時費その他	6600
	96000
	ポンド

この総額は各人あたり八十ポンドの投資額であり、年利五分とすれば毎年の賃貸料は四ポンドとなる。このわずかの費用で失業貧民を自活しうる状態におくことができる。しかも必要な資本をすみやかに返却することもできる。そしてもし土地を借りることができれば、わずか六万ポンドの資本を要するだけである。⁽³⁹⁾このような詳細な予算と合理的な経済計算のうえに、オーウエンは失業対策としての協同村計画を提案しているのである。

このような計画は、諸個人によって、教区によって、州によって、いくつかの州をふくむ地域によって、そして政府をつうじて国全体によって、なすとげられる。そして

その型も種々様々でありうる。しかし「全社会にたいする利益の多くは、計画が国民的になるまでは実現されな
いだろう。」⁽⁴⁰⁾とオーウェンはいう。すなわちこの段階では、協同村計画はまだ失業対策としての部分的なもので
あり、『ラナーク州への報告』におけるように、明確に社会改革の根本方策として提唱されたものではないけれ
ども、それへの発展の萌芽をふくむものであった。その意味でオーウェンの共産主義思想の核心が、この「ブラ
ン」にあったというるであらう。⁽⁴¹⁾

最後にオーウェンは、この計画の遂行からひきだされる利益として十二項目をあげているが、そのうちとくに
注目されるものは、「社会における最大の害悪は、人類が分裂の原則のもとに訓練されていることからおこつて
くる。提案された手段は、彼らの相互の利益のための共通の目的の追求において、人々を協同させるものであ
る。」⁽⁴²⁾と、オーウェン主義の根底としての協同原理を闡明していることである。かくしてこの『救貧委員会への
報告』において、オーウェン主義は生誕したものとみとめうるであらう。

さらにこの計画が、「工場労働貧民を現在の困窮から救助」しうるばかりでなく、「現在数の最小四倍の人口
を訓練し、教育し、雇用し、維持するための手段の過剰のただなかにおいて欠乏にとじこめられている」ところ⁽⁴³⁾
の全国民、全人類に救済の手をさしのべるものであることを強調して、結語としている。

(38) Owen, *ibid.*, pp. 59-60. Cf. p. 64.

(39) *Ibid.*, p. 60.

(40) *Ibid.*, pp. 60-61. p. 62.

(41) Cf. Cole, *ibid.*, p. 179.

(42) Owen, *Ibid.*, pp. 63-64.

(43) *Ibid.*, p. 64.

七

オーウェンは『救貧委員会への報告』を公刊したのち、公開集会を開催して、自己の原理とプランとを直接大衆に訴えようとした。このころまで、『新社会観』(*New View of Society*, 1813-16)の公表とニュー・ラナークにおける実行とによって、オーウェンが支持をうけてきた人々は、政府・教会をはじめ上流階級および中流階級上層の博愛主義者たちであった。そして支配階級のこの支持は、多分に新興資本家階級にたいする牽制策および労働者階級にたいする有和策の意味をふくむものであった。しかるに、オーウェンはこの時代には労働者階級とはなんらの交渉をもっていなかった。彼はその公的な生涯のはじめから労働者の真の友であった。しかるに彼らはこのころまで彼とは赤の他人だった。彼らの急進主義的な指導者たちは、オーウェンが彼らの敵で、権力者の友であり、そしてかの一致と協同の村々において彼らを奴隷にしようとするのだと、労働者に教えこんだのである。⁽⁴⁴⁾しかし支配階級によって自己の計画を阻止されたオーウェンは、いまや大衆に訴えるほかはなかった。

まず一八一七年七月二十五、六日に第一書簡 (*A Further Development of the Plan contained in the Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor*) を、八月七日に第二書簡 (*A Sketch of some of the Errors and Evils arising from the Past and Present State of Society, with an Explanation of some of the peculiar advantages to be derived from the Arrangement of the Unemployed Working Classes into "Agricultural and Manufacturing*

Villages of Unity and Mutual Co-operation) を書き、新聞紙上に発表して、プランをさらに詳述するとともに、集会の開催を予告した。そして八月十四日第一回の公開集会をシティ・オブ・ロンドン・タヴァンにおいてひらいた。会場ではブルジョア経済学徒や急進主義者たちの反対にあったが、翌日の各新聞はオーウェンの演説をくわしく報道し、そのプランを賞讃した。⁽⁴⁵⁾

彼はつづいて八月二十一日に第二集会を開催した。社会の変革を希求するにいたってオーウェンは、その進展を阻害する最大の障碍が「このころの闇の制度」⁽⁴⁶⁾としての宗教であることを認識した。そこで彼は生命を賭して、世界の全宗教の否定を宣言することを決意した。彼は演説を、ふたたび困窮原因の解明からはじめ、みずからのプランの説明におよんだ。それからつぎのように説きすすんだ。これほどの利益をもつこの計画がなぜいままでも採用されなかったか。それはこれまで人々に教えられてきた宗教の基本観念とむすびついた大きな誤りのためだ。宗教は人間が自分の性格をつくり、信仰は各人の意のままであるかのように教えてきた。これは人間をもつとも弱い、愚鈍な、悲惨な生物にするものだ。宗教は人類にとって最大の禍である。そんなものがあつては社会の改革は不可能だ。断じてかかるものを否定せねばならぬ。⁽⁴⁷⁾オーウェンは「その場で粉碎される」ことを覚悟していたが、満場は深い沈黙につつまれ、ついではげしい喝采がおこった。

しかし反撃はただちに開始された。オーウェン自身がのべているように、彼は「その日の朝までは文明世界においてもつとも人気のある個人であり、政府要人の多数にさえ大きな勢力をもっていた」⁽⁴⁸⁾のであるが、いまや教会および支配階級は彼を危険視しはじめ、新聞は彼を攻撃し、ついで黙殺した。ブルジョア経済学者および急進主義者たちは、いよいよはげしく彼を論難した。オーウェン自身、この第二集会を自分の生涯の転回点とみなし

た。オーウェンが決定的に共産主義者としてたちあられたのは、この宗教批判以後のことであった。いまや彼は、現在人間を奴隷化している「悪の三位一体」すなわち「私有財産と宗教と（私有財産にもとづき宗教とむすびついた）結婚形態」⁽⁴⁹⁾にたいして、宣戦を布告したのである。それはやがて（一八三〇年代前半に）、彼を労働者階級とむすびつけ、オーウェン主義を一時労働運動の旗しるしとさえするにいたった、原動力であった。

(44) Life of Owen, p. 160. 訳、(下) 四四ページ、参照。

(45) Ibid, pp. 156-157. 訳、三八―三九ページ。

(46) Ibid, p. 156. 訳、三八ページ。

(47) Owen, Address, Aug. 21, 1817. Life, IA, pp. 115-116.

(48) Life, pp. 160-161. 訳、四五ページ。

(49) Cf. Engels, Anti-Dühring, S. 324. 訳、四五〇ページ。Owen, Oration, July, 4, 1826. New Harmony Gazette, Vol. 1, No. 42. 五島茂『ロビン・ト・オーウェン著作史』一五二ページ。

八

このように共産主義者としてあらわれたオーウェンの協同村計画にたいしては、多くの反対論が浴せられた。まずブルジョアジーと提携して議会の民主主義的改革を闘い、とることがプロレタリアート解放の唯一の道であると主張し、当時労働運動の主導権をにぎっていた急進主義者たちから、はげしい非難の声があげられた。そのひとりであるホーンは、「だれでもオーウェン氏の博愛心および彼の目的がわれわれに多くのよいことをしようとするにあることを確信している。しかもわたしは彼に、われわれのことはほっておいてくれといいたい。という

のは彼がわれわれに多くの害をおよぼすことをおそれるからである。」⁽⁵⁰⁾ といい、また彼らの最大の指導者であったコベットは、オーウェンの計画を「ほとんど僧院生活の種類にぞくするもの」と酷評し、「貧民の共同体というようなものは、いまだかつていかなる人も聞いたことがないだろうと信じる。」⁽⁵¹⁾ ときめつけている。

しかしいつその理論的な批判は、経済学者たちによってなされた。オーウェンは前述の一八一七年八月のロンドンにおける集会においてブルジョア経済学者たちとの対立抗争にはいった。一八一九年六月のケント公主催の公開集会におけるトレンスの攻撃演説、それを拡充した同年十月の『エディバラ・レビュー』の論文は、彼らの批判の主要なものであった。トレンスは指摘した。オーウェンはいかなる基礎のうえにその村が建設されるのかということについて、はつきりした態度をしめていない。すなわち、村がそれ自身の生産物をすべて消費して自給自足であるのか、または外部と商業取引をするのかということがあきらかでない。もし前者のばあいには、一共同体の労働者数は、現在の製造過程によって必要とされているような労働の適当な細分をゆるさないだろうから、生産費は外部の社会におけるよりもいちじるしく高くつくだろう。しかしながらもし共同体が自給自足であるという考えを放棄し、それ自身の消費に必要な物品のあるものを獲得するために、それ自身の剰余生産物を交換するようになれば、ただちに市場の変動と攪乱の影響をこうむらざるをえないだろう。元来これらの影響から彼の植民地をすくうことが、彼の目的であったにもかかわらず、と。⁽⁵²⁾ このトレンスの批判は、たしかにオーウェンのプランの弱点をついたものであり、彼の協同村が商品生産社会のただなかにおいて存立しえないことをあきらかにしたのであった。このような批判に対抗するために、オーウェンは翌一八二〇年に著した『ラナーク州への報告』において、プランの経済理論的基礎づけにつとめることになったのである。

さらに古典経済学の最高の代表者リカードオも、オーウェンのプランに大きな関心をしめし、これによい反対の意思を表明していた。すなわち、リカードオはすでに一八一七年夏の公開集会の直後に、トラウワーあての手紙で、オーウェンの計画について否定的な皮肉をのべている。⁽⁵³⁾ さらに一八一九年六月オーウェンの熱心な後援者であったケント公主催の公闘集會がひらかれて、オーウェンのプランを調査研究する委員会 (Committee, under the presidency of the Duke of Kent, to investigate and Report upon Mr. Owen's Plan)⁽⁵⁴⁾ が選任されると、懇請されて不承々々それに入ることを承諾したが、その計画が自分の原理とあらゆる点で異なることを主張した。⁽⁵⁵⁾ そのすぐあと、おなじトラウワーあての手紙で、彼はつぎのようにのべている。「いったいものごとを合理的に考えることができる人で、社会の人々の私利私害にたいする考慮を刺戟しなくとも、ただ共同社会にたいする関心をかきたてて努力するようにしむけさえすれば、オーウェン氏の考案したような社会が、富み栄え、同数の人々がかつて生産しえた以上に生産することができると、氏とおなじように信じうる人があるでしょうか。数世紀の経験は氏の意見に反していません。氏はこの経験に反対する論拠として、財貨の共有の原理のうえに繁栄したという、しかし民衆が宗教的狂信の強力な影響のもとにおかれていた、典拠の不確実な一、二の事例を提示しうるにすぎません」⁽⁵⁶⁾と。古典経済学が立脚している私利私害と私的所有の原理と、オーウェンが立脚する協同と生産制の原理との対立が、ここにはつきりとしめされている。

リカードオは、さらに同年十二月十六日下院において、下層階級の状態を改善しようとするオーウェン氏の計画を調査するための委員を選任せよというサー・ウィリアム・ド・クレスピニイの動議にかんして演説し、オーウェンにたいする自己の立場をいっそう明白にした。議事録にはつぎのように記されている。「リカードオ氏は、

自分は、経済学の原理と矛盾する理論のうえにうちたてられた、そして彼の意見では共同社会にたいして無限の害悪をうみだすと予測される、オーウェン氏の体系とはまったく戦争状態にある (he was completely at war with the system of Mr Owen)、「とのべた。」まことに痛烈なことばであるが、さすがにリカードォはオーウェンの理論の意義をつかんでいた。「主題を完全に観察すれば、機械が労働にたいする需要を減少しないが (リカードォは二年後にはこの主張を撤回せねばならなかった——前述の『原理』第三版「機械論」において)、他方においては、それは土地の生産物を消費もせず、わが製造工のいかなるものをも雇用しないということとは、否定しえない。またときどき、あやまって木綿や布がたくさん生産されすぎることもありうる。しかしその結果これらの商品が製造業者に支払うことをやめるやいなや、彼はその手間と資本とをなにか他の目的にささげるだろう。オーウェン氏のプランは、この事実にかんして提出された。かくも機械の敵である氏 (とは明白な虚偽だ) が異った種類の機械を提案しうるだけなのだ。彼は機械のもつとも活動的な部分、すなわち人間の手を作業させようと欲している。」⁽⁵⁷⁾多くの誤謬と誤解ともかかわらず、リカードォはオーウェンのプランが失業と恐慌にたいする対策であることを認識し、これに自己の補償説と一般的過剰生産否定論とを対決させているのである。だがそのかぎりでは理論的な勝利がオーウェンのがわにあることは、すでにみたところである。リカードォはオーウェンのプランを評して、「国を平行四辺形に分つたり、財貨共有の施設をつくつたりするような、幻想的な計画⁽⁵⁷⁾」とよんでいる。

「リカードォとオーウェンとは二つの階級の代表者である。前者はすでに即自的階級となったブルジョアジーを代表し、後者はまだ即自的階級とならなかつたプロレタリアートを代表した。リカードォは現実的に思惟する理論家にして政治家であり、オーウェンは理論上でも政治上でも空想家であつた。リカードォはブルジョアジーの

利害を擁護し、かつこれに依拠していた。オーウェンは、彼がまだ依拠せず、また依拠しえなかつた、階級の利害を擁護した。⁽⁵⁸⁾ リカードォとオーウェンとの論戦を評して、ローゼンベルグはこのようにいつている。正真正銘の産業資本家であつたオーウェンは、いまやプロレタリアートの理論的代表者に転化したのである。⁽⁵⁹⁾ オーウェン主義はたしかに「本来ブルジョアジーからでたもの」⁽⁶⁰⁾ にちがいないが、それがプロレタリアートの利害を擁護する社会主義であつたことは否定しえない。ただし、それがこの段階でまだ労働者階級に「依拠」しえなかつたばかりでなく、ついに最後までこれと「融合することができな」⁽⁶⁰⁾ かつたという、致命的欠陥をもつてはいたが。

- (58) W. Horn in Reformists' Register, Aug. 23, 1817. Quoted Cole, R. Owen, p. 229.
- (59) William Cobbett in Political Register, Aug. 2, 1817. Quoted Cole, *ibid.*, p. 230.
- (60) Robert Torrens in Oct. 1819. Quoted Podmore, R. Owen, pp. 266-267.
- (61) Letter of Ricardo to Trower, Dec. 10, 1817. Works of Ricardo, Vol. VII, p. 218. 中野正訳『リカードォのトラリンの手紙』岩波文庫、八二二ページ。
- (62) Cf. Life of Owen, IA, Appendix Q. pp. 237-250. この委員会はオーウェンの計画実行のための寄付金をつめたが、ケント公の努力にもかかわらず、十万ポンドの所要額にたいして、わずかに八千ポンドしか集らず、失敗におわつた。
- (63) この集会における演説 (Speech at the Meeting on Mr. Owen's Plan, June 26, 1819) でリカードォは、「一応オーウェンの博愛心を賞讃しながらも、自分は、下層階級の状態改善と、その計画が公衆にたいして予期されているようなすべての善をうみだすにことごとくついで、彼とともたゆめつたはるきなら」となきりのべつづる。(Works, Vol. V, p. 468.)
- (64) Letter of Ricardo to Trower, July, 8, 1819. Works, Vol. VIII, p. 46. 中野訳『前掲書』一四三二ページ。

(57) Ricardo's Speech in the House of Commons on Sir W. de Crespigny's Motion respecting Mr. Owen's Plan, Dec. 16, 1819. Works, Vol. V, pp. 30-31. p. 31.

(58) ローゼンベルグ『経済学史』二巻、訳、三四六ページ。

(59) オーウェンは、ニュー・ラナークにおける第一回の合資では九分の一の持分しかもたなかったが、第三回の合資では一株一万ポンドの十三株のうち五株をみずからもつていた。 (Life, p. 78, 95. 訳一、一四一、一七〇ページ) このように掛値なしの資本家であったオーウェンの、資本家階級にたいするつぎのような痛烈な批判をみよ。「機械と化学力の急速な増加による急速な富の蓄積が資本家をつくりだしたのだ。彼らこそもつとも無知なもつとも有害な部類の人々であった。民衆の勤勞によつてつくりられ、しかもいまやこれらの新しい人為的な力のいやしい奴隷となった富は、いわゆる金持階級——なにもものもつくりえず、えたものはことごとく誤用する人々——の手に蓄積された。彼らの行為は、その結果からみて、彼らがいかに無知で、いかにその地位にまったくふさわしくないか、をあきらかにしている。」 (Life of Owen, p. 128. 訳一、二二八ページ)

(60) F. Engels, Die Lage der arbeitenden Klasse in England, 1845. Marx-Engels Werke, Bd. II, S. 453. 『マルクス・エンゲルス選集』補巻2、三六五ページ。「そこでわれわれは労働運動が二つの流派に、つまりチャーティストと社会主義者とに分裂しているのをみるのである。チャーティストはもつともおくれれており、未発達である。だがそのかわりには、真の、現実のプロレタリアであり、プロレタリアートの代表者である。社会主義者はチャーティストよりも深慮があり、困窮防止のための実際的手段を提案するが、本来ブルジョアジーからでたものであつて、そのために労働者階級と融合することができない。社会主義とチャーティズムとを融合させること……こそ、つぎになさるべきことであらうし、……このことが実現されたときにはじめて、労働者階級は真にイギリスの支配者となるであらう。」ここに社会主義者とはまったくオーウェン主義者の同義語であつた。

オーウェン主義の成立 (松田)

ともあれ、ブルジョアジーとプロレタリアート、この二つの敵対的階級を代表する理論が、たがいに「戦争状態にある」ということは、けだし当然である。それはむしろ一個の共産主義的思想体系としてのオーウェン主義の成立を、証拠だてるものといふべきであらう。